

Darjeeling: Siri Khola—Rimbick, 2100-2200 m (Kanai, Ohashi, Hara, Iwatsuki & Ohba, no. 723147, Aug. 5, 1972, fl.—type in TI); Rimbick, 2200 m (May 6, 1960, fr., TI); Palmajua, 2200 m (Aug. 7, 1972, fl., TI); Palmajua—Batasi, 2200-2100 m (Aug. 8, 1972, fl., TI); Kurseong, 1600 m (Hara et al., Apr. 12, 1960, fr., TI); Birch Hill, Darjeeling, 2100 m (Apr. 7, 1960, fr., TI).

E. Nepal: Mul Pokhari—Gorzu Kosir, 2200 m (Hara et al., Oct. 30, 1963, fr., TI); Bhandukay Bhanjang, 3000-2000 m (Dec. 3, 1963, fr., TI).

The species is clearly distinguished from *L. serratus* D. Don by axillary filiform spreading peduncles, smaller dark violet-purple corollae which are quite glabrous outside, more spreading calyx-lobes, and shorter styles about 5 mm long.

* * * *

70) *Anemone fuscopurpurea* Hara (新種) ハクサンイチゲを小形にし、花を暗紫紅色にしたようなもので、東部ネパール高山帯の産。

71) *Anemone rupestris* Hook. f. et Thoms. この学名の適用が混乱しているので、これを正し基準標本を選んだ。

72) *Viola bhutanica* Hara (新種) 葉に長い白毛が生えていてコミヤマスマレを思わせる一種で、ブータン、チンブー附近に多い。

73) *Begonia flagellaris* Hara (新種) 茎が地表上をつる状にはい、その節から花茎を立てる特性をもった種で中部ネパールの産。

74) *Lysionotus atropurpureus* Hara (新種) ヒマラヤにおけるシシラン属の第2の種で、ダーズリン地区や東部ネパールに産する。

○南方熊楠全集に載る真菌類など (小林義雄) Yosio KOBAYASI: Review on the Eumycetous fungi described in the "Minagata Kumagusu Zensyû" 1972-1974.

南方熊楠さんが外遊から帰国直後の1900年よりその逝去の年(1941)まで^ト々として築き上げた菌草類図譜は1万点以上の標本に基き15,000枚の原稿、5,000種のキノコ類が取扱はれたと称されるが、すべて未刊の儘であって、ここでは触れない。これ以外にも真菌類に関しての正式の発表は殆どなされて居らないが、取扱った記事は彼の随筆や知人宛の書簡の中にならかなり多数に見出すことが出来る。今般平凡社より南方熊楠全集が出版されたのを機会にこれらを通読し、大変興味深く、博学天才の一端に触れる思いであった。一庶民として官学に対する歯切れのよい毒舌、生物本能の根元である性とのかかわり合い、菌と自然破壊との関係、博学に物云はせて、それからそ

れへと流れて行く数々の実証、等々。ここに私がとくに興味を持った独創的な記事を御紹介し、それらに対する私の感想を記したいと思う。

1. 酒泉等の話 (全集 5: 445-467 原文発表年 1924) またしても酒のことじや、しかし根っから面白い上によほど国益にも教訓にもなる談ばかりゆえ、落ち着いて聴聞なされ。越後国北魚沼郡城川村、千谷川の酒造家星野忠吉氏宅は小丘上にあり、三囲みな 6 尺乃至 1 丈廻りで高さ数丈の老杉もて囲まる。いずれも今より 204 年前、正徳 3 年、その宅新築の際生垣として植えたが盛長したのだ。そのうち 1 本周囲約 6 尺の杉の幹、地上 2 間ほどの処より、2~3 分置きにブーブーと音を立て、ジュージュウと濁って白き酒様の液体を湧き出す。11 月 26 日雇人がその杉を距る 4 尺ばかりなる酒倉の雪囲いをなさんとし見出だした。嘗め試みると甘渋く付近は醇なる芳香漾う、発見せし節はその液流れて白く、また 1 部 1 部に青かび生じ美観を呈し虻蜂の属盛んに飛び来たり吸うた。噴き出しの箇所より下 2 間は酒花で白く浮き上りおり……発見の当時不思議の感に打たれ来たり観る者 1 日に 2,500 人、5 日間開場して 5,6 千人、いずれも嘗め試みて祥瑞と称えざるなく、当時 1 日に 4 合瓶 1 本ほど迸出したが、最初より 1 月末までおよそ 1 斗 5 升は得たるやらん……。予は熊野の山野でしばしばシュロ等の切株に柿のごとく赤くて柿が腐ったような臭ある半流動体湧き出づるを見、その標本は現に座右にあり……。去年 7 月拙宅の裏なる苦竹の藪辺にシャンペンとサイダーを合わせたような香気鼻をつき、酒嫌いな拙妻などはその藪に入るを嫌うたほどだったので、よく視ると、前年切った竹株から図のような葛を煮たような淡乳白色無定形の半流動体がおびただしく湧き出て……。

小林曰く……斯の文は延々と続き、その間には少々オーバーかも知れぬが養老滝の伝説をはじめとし古今東西の文献が挙げられている。しかし南方家が酒造業に関係があったにも拘らず、微生物に関心が薄いとことわって、微生物学的研究を行って居らないのは残念である。私が戦後に樹液菌に関心を持ち、1953 年に研究成果を発表した当時は南方さんの記事のあることは知らなかった。その後、樹液菌の分類、生態的研究が日米協力研究のテーマに取上げられ今日に至って居るのは周知の通りである。

2. オニゲナ菌 (全集 6: 33 原文 1913) 拝啓。「草本相生相剋」の話さっそく差し上ぐべきのところ、当時小生自宅の庭にオニゲナと申す希有の菌あるを見出だし、その発生成長に関し、欧州学者の説を試みるため実験に掛かる。たとえば、その菌の胞子を毎夜庭の柚樹に来たり宿る ミミズクに食わせ、糞に混じて落ちた上で初めて日々の経過を察し得る都合だが、なかなか思う通りに運ばず 20 日ばかりしてやっと 1 団の糞にかの菌が少しく生じたので連日鏡検に奔走中、1 疋の蟻に陰茎を噛まれ、身体所々に悪瘡を生じて……とにかく陰を噛んで全身腫れ出す蟻は何の種のものということを明らかにするため、彼処へ砂糖また雞の煮汁を塗り、毎日午後件のオニゲナ菌が生えた処にうずくまり居た。蟻に噛ませる処が処ゆえ妻は大いに心配し、必死になって思い止まっ

て下さんせと諫めたが、こうして今に噛まれて見ろ、済生術上の鴻益ともなり、たとえ噛まれなんだところが希有の菌の発生経過について発見するところありだ。女子供の知ることならずと1月ばかり試って見たが彼処が湿って痒いばかり、蟻はさらに来たらず、ひでりで菌も消え失せて仕舞う……。

小林曰く……こんな具合でキノはキンでも別のキノと蟻の話に移行して、ついにオニゲナ菌の結論は出なかった。戦後山形県下で清水君がフクロウの骨上にオニゲナ菌を見出し、私共が研究して *Onygena corvina* と同定し1959年に発表したのが我国最初の報告と思うが、最初の発見は南方さんに譲ることになろう。それにしても種類の同定がないのはおしまれる。

3. トルーフル菌 (全集 1: 543 発表 1923) トルーフル菌は欧州に 食道楽の旅をした人のあまねく知るもので、予はあまりゾッとせぬが、あちらでは非常に珍重し……、真正のトルーフルは1897年までに35-55種ほど発見されおった。松村博士の帝国植物名鑑上にチュンベルグの日本植物篇によって本邦にも1種あるよう出しおれど白井博士の目録にはこれを載せず (小林曰く、チュンベルグの菌は松露である)。予はこの23年間鋭意して搜したれどわずかにトルーフルに遠からぬエラフォミケス属の菌に寄生するコルジケプス1種を獲ったばかりで真のトルーフルを見出ださない。真のトルーフル中最も重要なのはチューベル・メラノスポルム。これは円くてあらい疣を密生し、茶色または黒く、その香オランダ苺に似る。上等の食品として仏国より輸出し大儲けする。秋冬、ブナやカシの下地中に生ず……前年御大典に臨み、外賓に供するに現なまのトルーフルと緑色の海亀肉を用いたら、そっちも飲みこちらも儲けると、今さら気づいた人あって足下は当世の陶朱、子房だから何分播種してくれと、処女を提供せぬばかりに頼まれたが所詮盗人を見て縄をなう急な相談で……、なぜトルーフルがかく尊ばるるかというに、相も変わらず古今を通じて浮世は色と酒で、この品ことに精力を増すから、旧く嬌女神アフロジテの好物と崇められ……。

小林曰く……この項も更に続く。しかしさすがに眼光人を射る南方さんでも、地下に生ずるトルーフルにまでは眼力が及ばなかった。現在トルーフル属には80種ほど知られ、欧州、北アフリカ、北米に分布し、ローカルではあるがカナリー島、ヒマラヤからも報告がある。私もこの40年間鋭意探して居るが、運にめぐまれない。しかしいつかは我国でも発見されると確信する。ただし先年秩父の山中で清水君が採った菌はこれに最も近く、私はクルミタケ (*Hydnotrya carnea*) の名で1957年に発表した。これを聞きつけてフランスの新聞記者がインタビューに来た。ここでひとつ、まじめな提案をしたい。それはトルーフル狩りに熟練した豚か犬を数頭輸入することである。そのアッセンの労は私がとつても宣敷い。

さて本年の7月11日にNHKのテレビの特別番組としてフランスの有名な食品や料理の紹介があり、例のフォアグラとともにペリゲーのトルーフル狩りの写真が数分間

紹介され、すっかり嬉しくなった。コブシ大のもので1個25,000円位と説明して居った。こんな程度なら10個位を大皿に盛り、フォアグラとよく吟味したブドー酒を用意し、同好の士を誘って牛飲馬食し、この世の食い納めとすることも容易であると思った。

4. 冬虫夏草 (全集 7: 96, 485 8: 49 9: 612) この山 (那智山)、古来有名の冬虫夏草 (西インドの *Guêpe vegetale* と等しく、図の如き大冬虫夏草を生ず、この他ミミズ、ムカデ等にもそれぞれ別種を生ずるは今日はなほだ少なくなれり。……この山 (田辺の闘雞神社境内) は梅雨ごろに一切の虫に特様の寄生菌を生じ、冬虫夏草を多く生ず、千態万状……。

小林曰く……南方さんもこの類には大いに関心を持って居られたことが伺はれるが、その割合には新発見は少いようである。未発表の図譜のリスト中にも本属は只の4種が挙げられて居るに過ぎない。いまでも南紀をよく探せば10種以上を獲ることはそれほど困難ではなからう。文中にミミズ、ムカデにつくとあるが、これは如何したものであろうか。単に書簡文であるから、遂い筆の勢でこんなことになったとしか思はれない。

5. へろへろほうきたけ (全集 9: 611 記 1941) 樫山嘉一宛: ……8月3日に御贈り下されたる菌の内、図のごときほうきたけ (暗紫色、へろへろと動揺しふるえる。他のほうきたけは肉質で、物に突き当たれば折れるが、これは折れず。膠質すなわちニカワを火で焙ったごとく、柔らかくへろへろとコンニャクのようにふるえ動くなり) はかって見ざる品で米国にこれに似ながらずっと小さきものあることを書籍で見及び候。

小林曰く……これは正に私が1937年に発表した *Holtermannia* 属の菌であると推定される。図から考えると *H. coralloides* に近いが、これは基部が淡い暗紫色で、南方菌と多少の相異がある。南方さんはこの書簡を出してより数十日後に他界された。

6. ヘニングシア (全集 9: 599 北島脩一郎宛 1937) ドイツ人メーレル博士はブラジルで傘がイクチ属同様肉質で、傘の肉より孔を引き離し易きものながら、あるサルノコシカケ属のごとく傘の横に茎が付きたるものを見出だし *Henningsia* と命名せりこの属の唯一種 *H. geminella* (双生児の義) というのは、図のごとく傘が2つ重なり生ずるを常例とす、しかるにこの属の定義を十分呑み込まなんだ人が……この属はサルノコシカケ属の一種に過ぎずと断定して、この属名を取り消してしまえり……今月2日貴下みずから持ち来られし奇菌をみると、どうもこれこそ第2の *Henningsia* にてメーレル博士の定義に違わず、傘が肉質にて、サルノコシカケ属に比べてすこぶる柔らかく弾力ありながら、強く指でつくとへこむ。茎が横に付き様も丸でこの属の原種に異ならず。故にこの貴集品より推して *Henningsia* 属は決して取り消すべきほど不確実なものにあらずと分かり……、またメーレル博士の本種は胞子はほとんど球形で平滑無色なる由。しかるに貴集品は褐色で球形ながら多少刺ありしと覚え候。なお実物を精査せば違う点が若干あるべし、果たして違う点が多くある場合には、これを

ヘニングシアと区別し、*Kitajimana* という新属を立て、*K. notabilis* Minakata なる学名を付けんと存じおたり……。

小林曰く……本属に対する一般の見解としては、認められて居らないのが現状である。エングラの植物分科大全初版(1900)には一度取上げられメーレルの図も引用してあるが再版(1928)では疑問属となっている。また *Polyporus brasiliensis* の幼い異常形のもを扱ったという見解もある。私自身はこれについて大した関心はないが、南方さんが斯る特殊なものにも異常なほどに熱をあげられたことに敬意を表する。但し傘が2枚重なって生ずることは南方さん自身も述べて居るように属や種の特徴とはならない。

7. 牛肉蕈(全集 2: 134, 530) 仙書に、上帝肉芝を某仙に賜うとあるは、紀州などに多き *Fistulina hepatica* ならん。形色牛肉に酷似し、かつ鮮血様の紅液をしたたるゆえ英語に vegetable beef steak (牛肉蔬) と呼ぶ。支那の古道士輩が、自然に窒素分多き菌類の畜肉と等しく滋養分に富めるを覚って、これを嗜み重んじ、したがって菌類について智識広かりしを、諒するに足れり。

紀州のシイ樹林に多く生ずる牛肉蕈は、形色まるで上等の牛肉だから、予はしばしばこれを食う。

小林曰く……これは一般にはカンゾウタケと云はれ、生のままマヨネーズなどつけて食べることも出来る。切口は牛肉の霜降りそっくりである。余談ではあるが我国の多くの菌学者は伝統的に本菌を欧米のそれと同一種として疑はない。しかし私は分布、生態、形態的見地からこの点に多少の疑問を持っている。慧眼な南方さんもこれらの点には気附かれなかったようだ。

8. キノコのひだ(全集 8: 526 挿図 1912) 日本人が科学の発達、洋人に劣れるは、その学の学才が足らぬにあらず、学問上の問題を見出す智慧乏しきなりとて、図のごとく蕈類の裏のヒダの整列の方が種属によりみな異りおる。今日までも洋人専門家も、これを何のわけか看過し、また記載の方法さえ立ておらぬが、何か理由のあるべきことと思うから、1つ数理で考えみられよ。

小林曰く……この問題は必ずしも数理一点張りで解明出来るとは思はれない。ラジエーターの放熱管の構造と同一視する訳には行かないのである。キノコの種属によって特性があり、進化の段階によっても異り、環境条件にも依存するであろう。しかし南方さんの云はれるように、斯んな簡単な事柄にも色々な問題が含まれている。

9. 山うばのかみの毛(全集 2: 535 出版 1914) 山婆の髪の毛と那智辺で呼ぶ物、予たびたび見たり。水でぬれた時黒く、乾けば色やや淡くなって黄褐を帯び、光沢あり、やや堅くなる。長きは7-8寸、また1尺にも及ぶ。杓人などに聞くにずっと長いのもありと……。予那智山中で始めて見し時、奇怪に思いしが、近づき取って鏡検して、たやすくそのマラスミウス属の帽菌の根様体(リゾモルフ)たるを知ったが、そ

の後、宇井縫蔵氏が近野村で取り来たりしを貰うと、予想通り マラスミウスの傘状体一つ生じあった。1906 年版、スキート、ブラグデン 合著「馬來半島異教人種誌 1 卷 142 頁」等にセマング人が岩蔓（アカール）とて尋常の靴紐よりやや細く黒く光るなめし革様の物で腰帯を織るにすこぶる美なり、ワード教授これを鏡検すると、菌の根様体だった、と出づ。わが邦の山人もかかる物を多少の身装としたかも知れる。例の七難の揃毛（^{ソツマ}全集 8: 84 参照）も異様に光るといふが、こんな物で編み成したのでないか……。安堵峰辺で、縦に着く山塗のつびくそと呼ぶ物を 2 つ採ったが、これは鼠色で膠の半凝様の菌で裏に細かい針がある。トレメロドン属のものだ。予は従来この属の菌が日本に産する記録を見ず……。今一種全体純白で杉の幹につくものを那智山で見出だした。いずれも砂糖をかけると、寒天を食うように賞翫して、全く害を受けず。

小林曰く……これは大変興味あることである。すでに白井：植物妖異考にも取上げられ、日野さんの博引旁証に富む論文も出て、そのタイプは科学博物館に保存されている。私も戦前から我国は勿論、熱帯地方の資料を集め、相当な点数に達したが未だに整理する余裕がない。この中にはマラスミウスのみならず *Xylaria* 属の数種も含まれている。次に南方さんの文中のつびくそと杉につく純白のものについては、私が整理して 1954 年に発表した。即ち前者は *Pseudohydnum gelatinosum forma fuscum* であり、後者は *forma album* である。生食して美味であるが大量に採り得ないのが欠点である。

10. 山神の小便（全集 2: 545 出版 1914）これは白井博士の植物妖異考にも載せてないが、熊野で往々見る。樹枝が折れて垂れ下がったり、藤葛が立枯れになったのが、一面に白色で多少光沢あり、遠く望むと造り物の小さい飛泉のようなものだ。以前はこれを山神の小便と称え、その辺に山の神が住むと心得たが、今は土民もこれは一種イボタに類した虫白蟻と知って、那智村大字市野野で、ある人が採って来て座敷の敷居に塗抹し、障子が快く動くと悦んでおのを見た。

小林曰く……南方さんの見解も真実であると思うが、果してイボタ蟻虫のみが原因であろうか。私も虫蟻は海岸や山中で往々見ているが、このために簡単に木の枝が垂下したり立枯れるとは思はれない。南方さんは触れて居らないが、紀州の本草家呼田翠山（1792-1859）の著した熊野物産初志に山むばの休め木というものが載っている。これを山神の小便と呼ぶこともあったのではないか。後者の状況は南方さんの表現にそっくりである。これについては私が整理して 1971 年に発表した。セルロースを犯す新種の菌が原因である。

11. カウルとヒヨウタケ（全集 9: 365 書簡 1920）カウル（Caul）は時として児の頭をつつんで生まるる小膜にして、父母交会の際常軌に外れたることあるより生ずるらし。かくて生まるる児は幸運あり、俗説にはこれを買ひ持つ人は危禍を免るといふ。

ローマのラムプリチウス説に、ジゲズメニアヌス、実にこれを被って生まれ、ついに帝者となれり、サー・トマス・ブラウンの俗説弁惑に、およそ胞衣は3層より成り、最外層は動脈と臍帯を具えており、その次の層は水（小便なり）を受く、最内層は汗を受く。さて小児が胎を出づるに臨み、最内層の一部を頭に冒って出づることあるなり。豹草など申す菌が a より開裂して c になるとき、全く外被層を脱し出づるは稀にて、幾分が d ごとく（挿図があるが略す）外被層多少の断片をかぶり出づるなり。ブラウンの説はこの通りの意味なり……。

小林曰く……テングタケ属の Volva と人間胎児のカウルとの比較論は南方さんらしい考察である。一步進めて Volva の破片を傘上につけたベニテングタケが西洋で古来幸福の象徴とされているのは、カウル児のそれと関係がありそうに思はれるが、今となつては尋ねるすべもなし。

12. 馬勃（全集 1: 245）韓退之がいわゆる「牛溲馬勃俱に収めみな蓄う」で良医が用うれば馬糞も大功を奏し、不心得な奴が持てば金銭も馬糞同然だ。退之の件の語中の馬勃は牛の小便に対して馬の糞を指したんだが“本草”に掲げた馬勃は馬糞に似た担子菌リコペルドン・スクレロデルマ等諸属、邦俗チリタケ、ホコリタケなど呼ぶものに当たる。

小林曰く……真に同感だ。駄足を加うれば、馬糞如きものも、能ある菌学者が用うれば、相当な論文をつくり出せること疑いなし。

13. ポリサックム（全集 1: 246 1918）図に示すは、ポリサックム属の2種、いずれも田辺で採った。ちょっと見にはこれも馬の糞生写しな菌である。今までおよそ20種ばかり記載されたことと思うが、予が知り及んだところ濠州にいと多種あり……本邦では18年前、予英国より帰着の翌朝、泉州谷川で初めて見出し、爾後紀州諸郡、ことに温かな海浜の砂中に多く……、自分永年の観察をもってすれば、この3種は確乎たる別種でなくどうも *Polysaccum pithocarpium* という一種の3態たるに過ぎぬごとし。さてこの菌は染料として効果著しきもので……予がこの菌を染料に思い立ったのはフロリダで支那人の牛肉店に見世番を勤めておった時のことで、決して書籍で他様の智慧を借りたのではないが、万事について書籍を楯にとる日本の学者が……

小林曰く……この文は延々と続く。文とは直接の関係はないが、今から30年余以前のこと、上海の自然科学研究所に勤務して居た友人、橋本さんから彼地で馬勃の一種として薬用に供している菌の鑑定を求められたことがある。これがポリサックム即ちコツタケであった。次に今から10年余以前に西洋医学の立場からこの菌の利用を研究していることを知った。これについてはその後の経過を聞いて居らない。

14. カロストマ（全集 7: 409 土宜法竜宛書簡 1903）カロストマという菌の一族あり。世界中に今は20種内外あるべし。はなはだ美なる菌なり。さてこれを当世無双の菌学大家マッセー氏が分布を大別して東西2群とす。東群は東半球にのみ産し、その

種子を顕微鏡で見るに図のごとく球状にして刺あり。西群は北南両米大陸の外に濠州にのみ産し、その種子長楕円にして刺なし……。しかるに一昨冬、予偶然に勝浦の親戚の土堀場よりこの属の一種の菌を、おびただしく取り出す。これを験するに、全くその種子長楕円にして刺なく……。しかるに、今年 4 月件の勝浦を距ることわずかに 1 里半ばかりなるこの那智山中にて、予はさらに右と同属の菌にして右とやや異なる菌を見出す。同一のものと思ひ、すておけり。しかるを、前月ちよっとしらべるとはなしに偶然鏡下に照せしに全く別種にして、その種子は図のごとく円くして疣あり。いろいろとしらべしにセイロンにある 1 種と全く同種と知れり。されば、今度は日本のこの一属菌の分布上の位置はまことに混雑にして、従来東西 2 群と分けたる 2 群の楕円子のものと、円球有刺子のものとふたつながら、日本、しかもこの当国当郡中わずかり余を距る地に混居するを知れり。

小林曰く……種子(胞子)が長楕円形のものにはクチベニタケ (*Calostoma japonica*) であり、球状で刺のあるものは東南アジアからインドにかけて分布する *C. junghuhnii* と推定される。数年前に私はヒマラヤ産の後者の種類と日本のクチベニタケとを比較検討して論文を発表した。当時南方さんの発表のことは知る由もなかった。さて南方さんが今から 70 年前に *C. junghuhnii* に相当する種類を発見して居ったという事実と、その後私も含めて日本の菌学者の誰一人もこの種類を日本で確認しなかったこと、これらの 2 点はいささか問題になる。両種は外観がよく似て居るが、今後は野外で採集の機会ある毎に種類を確認したいと思う。また同学の諸氏にもお願いしたい。

15. スフェロボルス ステルラッス (全集 3: 132) この菌日本では明治 34 年予始めて和歌山市で見出だしたが、その後紀州到る処多くあるを知りてまた同属のものこの他に 2 種見出でた。この菌古い壁や木や竹に群がり著き、外胞囊が内胞囊を包み、内胞囊中に多数の胞子あり。外胞囊は皮 2 層よりなり、胞子成熟すれば従前円かった外胞囊の上半が星様に裂け開き、その皮の外層は旧のまま据りおれど内層たちまち縮み締まって、たった今まで凹んだ底が急に円き頂となって強く跳ね起きる。その力でこれまで包みおった内胞囊を遠方へ弾き飛ばす。この菌径 3 mm をこえず。しかるに、その音は 10 畳、12 畳の室中聞こえ渡る。すべての容子すこぶる臼砲のごとし。

小林曰く……このタマハジキタケ (*Sphaerobolus stellatus*) は世界的に著名な珍菌で、あまりまともな処には生えない。生態や外形は粘菌に似た点もある。私も昭和のはじめに小石川植物園の南側で朽板や古縄の上に群生しているのを見付けたのがはじめで、植物の驚異という出版物に委しい記録を載せた。また数年前にはアラスカのアンカレジ附近の森林内でムースの糞上に見出したが、これはアラスカでの最初の記録となる。

16. プチコガストル (全集 7: 485 挿図あり、松村任三宛書簡) この新種のプチコガストルは英国博物館のスマス嬢に贈りしに、多忙なりとて今に名付けず、何に致せ

珍しき新種なり。もし名つけくる人あらば、小生は多量に進上せん……。小生、書籍至って坐右に少なく、書籍を持って採集すると、いろいろの僻断を生じ、○○○○のいわゆる書物の方が正しく天然物が間違ったように見えるものゆえ、書籍なしに片っぱしから図を取りおれり。この Pt. は *Ptychogaster albus* Corda と同大同形の孢子あれど、*albus* の孢子淡黄赤色なるかわり黄灰色、また *albus* のは滑面なるにこれのは刺あり、または条理あり。

小林曰く……本属はコルダによって設けられた古いものであるが有性器官をつくらぬために正当な分類体系からは除け者扱いされていた。しかし現在のように完全型と不完全型との関係が重要視されて来ると、そのうちにまた脚光をあびるようになる。多孔菌の不完全体で日本のヒラフスベもこれに属する。

南方さんの書籍云々には賛成し兼ねる。野外調査、観察も大事であるが、これと同様に十分な文献を手許へ置くか、或は利用出来る体制をつくることも重要である。これが出来なければ、さっさと分類学者を廃業し、自然愛好者として自由に振舞えばよい。

17. きつねのちんぼ (全集 6: 71) 田辺辺できつねのちんぼと呼ぶ菌がある。西洋でも学名チノファルスすなわち犬の陽物という。田辺より 6, 7 町隔てたる神子浜という村の少女、現に予の方に奉公する者云う、この菌は蛇の卵より生ず、と。実に胡論なことと学校教師など笑う。熊楠はちょっとも笑わず、しきりに感心す。故何となれば、秋日砂地を掘ると蛇卵と間違うべき白い卵形の物がある。それを解剖するとチノファルスの芽だと分かる。それが久しく砂中にあるところへ雨が降ると蚊竜豈久しく地中の物ならんや、たちまち怒長して赤き長き茎が伸び立ち頭に臭極まる粘液潤う。それを近処の蠅が群れ至って食うと同時に、孢子が蠅の頭に着き、蠅が他所に飛び行き落として菌糸を生じ、次に蛇卵ごとき芽を生じ、雨を得てまた怒長する……。きつねのちんぼなど云わばその菌その物に何か大敗徳の要素みちをる如く心得、一顧の価値なき物と斥け了るが、万年青や蘭の鉢植栽を一年眺めたって心懸けなき者には何の所益なく……。

小林曰く……要するにキツネノタイマツ (古い属名は *Ithyophallus*) の啓蒙記事である。南方さんが 1931 年に情事を好く植物という表題でこの文を新聞に載せたところ、そのすじより風俗壊乱のかどで罰金 100 円をとられたと別の箇所述べている。

18. こむそうだけ (全集 2: 134 1911) その (酉陽雜俎) 卷 19 に見ゆる梁の延香園の異菌のごとき、詳細の記載、明らかにコムソウダケのある種を眼前に想見せしむ (予の *The earliest mention of Dictyophora*……Nature I (1894) 参照)。

小林曰く……段成式 (9 世紀) による唐代の随筆集“酉陽雜俎”の中からコムソウダケ、即ち近代の中国料理の材料として著名な竹孫 (キヌガサタケ類) の記録と思はれるものを拾い出すようなことは南方さんならでは出来ぬ業である。